

質的研究における対話の可能性—方法の探究

沖潮 満里子^a

^a 湘北短期大学生活プロデュース学科

【抄録】

本稿は、質的研究において、研究者の主観や対話を用いた研究がいかんして研究たりうるか、その可能性を明らかにすることを目的とする。そのために、(1) 質的研究は研究である、(2) 研究者の主観をデータにした「研究」は研究でありうる、(3) 対話で得られたデータに基づく「研究」は研究でありうる、という3つの命題について段階的に明証する。その際、人々の考えや思想を支えてきた認識論の変遷を追っていく。最後に、研究者の主観や対話を用いた研究がいかなる方法によって可能となるのか、現象学を背景とする間主観的アプローチについて論じる。

【キーワード】

質的研究、認識論、方法論、主観、対話

1. はじめに

心理学や社会学など、社会科学における実証研究は、その方法から量的研究と質的研究に二分される。量的研究は、伝統的で、統計的処理が施された、仮説検証や物事の予測をする数量的な研究の総意である。質的研究は、量的研究に対比するものとして、言語を中心とした、いわゆる質的なデータの収集・分析を通してなされた研究として捉えられることが多い。しかし、質的研究は、ただ量的研究への対比として生まれたものではなく、「量的研究を自明のものとするのではなく、別のものの見方やとらえ方を探索しながら〈現実〉をとらえ直そうとする営み」(p.23)であり、従来

の知に絶えず問いを投げかけ続ける構えを総称したものである(能智, 2011)。McLeod (2001 / 2007)によれば、質的研究の本質は、世界がどのように構成されているかについての理解を深めることを目的としている点にある。世界は複雑であり、社会的・主観的・関係的に織りなされているものであるがゆえに、多様な視点から見るのが可能であるともいう。これら2つの定義を踏まえると、質的研究とは、新たな視点を用いて、多層的な〈現実〉世界の構成のされかたを探究するひとつの研究の営みであるといえるだろう。

近年では、研究における質的アプローチの意義はある程度理解されるようになってきた。たとえばグラウンデッド・セオリー・アプローチなど、質的研究とはいえ数量的研究の特徴を部分的に取り入れた方法は、実証的な研究の方法として認知

<連絡先>

沖潮 満里子 okishio@shohoku.ac.jp

されつつある。その一方で、質的研究は、研究者の主観が入り込んだ客観的ではないという理由で研究の範疇には入らないのではないかという批判を受けることもある。

筆者がこれまで行ってきた質的研究は、対話的な自己エスノグラフィ（沖潮，2013；2016）と呼ばれる研究者の主観や経験をデータとする研究方法と、語り合い（原田・能智，2012；大倉，2002；2008）と呼ばれる、研究者も協力者と同様に語りに参加することを基にしたものである。いずれの方法も従来の質的研究の枠組みとはまた異なった、研究者の主観や対話そのものの特性を活かそうとしたアプローチである。伝統的な研究において排除されてきた研究者自身の主観を活用する方法が受け入れられるのはそう容易なことではない。

そこで、本稿では、研究者の主観が入った、研究者も語りに参加するアプローチには、いったいどのような背景があるのか、そしてなぜこれらの方法が必要なのかについて説明していきたい。本稿では、以下の3つの命題について段階的に検討した上で、研究者の主観、そして人と人の対話によるデータを基とした研究がもつ可能性について明らかにすることを目的とする。

- (1) 質的研究は、研究である
- (2) 研究者の主観をデータにした「研究」は研究でありうる
- (3) 対話で得られたデータに基づく「研究」は研究でありうる

以降では、はじめに「研究とは何か」という問いについて、従来の伝統的な量的研究の概念と質的研究のそれを比較検討しながら論じる。次に、主観や対話に基づく研究は、研究のひとつのあり方であるということ論じる。その際、人々の考えや思想を支えてきた認識論の変遷を追っていくこととする。最後に、そのような研究がいかなる

方法によって可能となるのか、現象学を背景とする間主観的アプローチについて論じる。

2. 研究とは何か

はじめに、研究とはどのような営みであるのかについて考えていきたい。まず研究の定義として、心理学者の McLeod (2003) は、「他者に伝達可能である意味のある命題や結論を導くための、体系的な情報収集と分析のプロセス」と定義している。この定義を部分的にみていくと、まず方法として、「体系的な情報収集と分析」というものがあり、結果として生み出されるものが「意味のある命題や結論」であり、さらにそれが「他者に伝達可能である」必要があるということである。これらの3点について、以下では掘り下げてみたい。

まず、研究の方法としての「体系的な情報収集と分析」がポイントとして挙げられる。従来の自然科学的なアプローチを用いた研究であれば、多数の数量的データ（この定義における「情報」に相当するだろう）を実験あるいは調査によって収集し、統計解析を施すという過程のことを指す（南風原，2001）。しかし、この McLeod (2003) の定義にはそのようなことは含まれておらず、必ずしもその手続きを採ったものだけが研究というわけではない。「情報」は数字だけではなく、質的研究においては、インタビューにおける語りであったり、人々が暮らす生活場面を切り取ったものであったり、絵や写真もいわゆる質的データと言われる「情報」となりうる。また、その「収集」においても、必要な情報をどのように得ていくか、入手手段の検討や、インタビューと観察を組み合わせるなど収集の仕方を多面的にすることで確からしさを高めていくトライアンギュレーション (Flick, 1995/2002) という手続きを採るなど、体系的な工夫がなされている。「分析」も「収集」

と同様で、質的研究においては、目的にあった方法をブリコラージュ（器用仕事）的につくりあげていくことが重要とされている（McLeod, 2001/2007; 能智, 2011）。そのような中でも、「(情報の意味を) ほどく」「(情報の部分と部分)をむすぶ」「(情報を整理・統合して)まとめる」という3相を円環的に経ていくことが質的な分析の概要となる（能智, 2011）。このように、質的研究においても、はじめのMcLeod（2003）の定義にある「体系的な情報収集と分析」は適用できるものであるといえるだろう。

次に、「意味のある」知とはどのようなものだろうか。意味があるのかないかということつまり、その知の「質」が高いということとほぼ同義だろう。具体的に従来の伝統的な研究、いわゆる自然科学的な研究では、妥当性や信頼性の高い、数量的に定式化された結果というものが意味のある知だと考えられる（市川, 2001）。つまり、評価基準としての妥当性や信頼性があり、これらの度合いが高いほど、質が高い研究とされてきた（南風原, 2001）。また、予測と根拠、そして仮説とその証明といったような、いわゆる普遍的な法則を見出すことは自然科学においては重要ではある。

しかし、この考えは、自然科学的なアプローチにおける研究を主に対象とするものであり、質的研究にそのまま適用できるものではない。量的研究の基準を質的研究に応用しようとする、状況をコントロールしたり、データ収集の条件を制限したりする必要などもあり、質的研究の特徴や利点を殺してしまいかねないからである（能智, 2005）。さらに、人間科学とか対人援助においては上述したものだけが役に立つとは限らない。

質的研究では、「意味のある」知というものをさらに幅広いものとして捉える。すなわち、人を外側から操作して理解するのではなく、人を内側

から理解し、人としての了解可能性（大倉, 2008）を高めていくような知であったり、人の心を打つような知（Behar, 1996）といったものが考えられる。また、量的研究における一般化に類似する、他者や他の場面への転用可能性（Lincoln & Guba, 1985）が高いものもそれに含まれる。たとえば、心理臨床をはじめとする対人援助における研究から得られる「意味のある知」とは、実践において有効な援助方法の開発や、具体的な事例から見出された、別の事例への応用可能性を秘めた人間の心理であったりするのである（下山, 2001）。

このように、質的研究には質的研究だからこそ見出すことのできる「意味のある知」というものがあり、それは何かしら人の役に立ったり、人が心を動かされたり、人間の理解を深めるものであったりする。また、量的には捉えられない人間の生の現実や本質を研究できるものでもある（Flick, 1995/2002; 鯨岡, 1999）。そのような点からも、質的研究は質的研究なりの「意味のある」知を生み出すことが可能なのだと考えられるだろう。

最後に、研究の結果として導かれる、あるいは生み出されるもの、いわゆる知とも言えるものが「他者に伝達可能である」必要がある。これは先に挙げた了解可能性（大倉, 2008）にもつながる条件である。まずは、生み出された知が、他者に届き、そして何かしら他者の役に立ったり、他者を刺激することで新たなやりとりを産む契機になったりすることが必要だと考えられる（能智, 2011）。自然科学においては、数字という共通のコードを用いることによって伝達可能性を高めており、効率のよい媒体であるのは確かである。しかし、数字ではなかなか伝わりにくいこともあるのは普段の私たちのコミュニケーションを考えても納得できるだろう。日常生活において私たちは

言葉を主に伝達手段として使用している。言葉のわかりやすさ、明確さというものがあれば、自然科学で用いられる数字や記号を読み解くことよりもより確実に、伝達可能性を高めることもできる。この点からも、質的研究は「他者に伝達可能である」ものだと言えるだろう。

以上、これまでの議論では、McLeod (2003) による研究の定義における条件について、自然科学的なアプローチにおける条件と、それに相当する質的研究における条件をそれぞれ比較しながら検討してきた。まとめると、研究とは「どこかで人々の生につながる知、何かしら人々の生活に役立つような新たな知を、体系的な手続きを通じて創り出す営みである」と言えるだろう。質的研究もこの研究の定義の範疇に入るものであり、従来の自然科学的な研究とはまた異なる、人々の世界に役立つ知を生み出す営みであると考えられる。

3. 認識論と方法論

前節では、研究とは何か、そして質的研究とはどのようなものかについて考え、それを通じて命題(1)「質的研究は研究である」ことの確認を行なった。次に、研究者の主観や、対話を活用する研究が自然科学的な研究と対立するものではないことを示すには必要なまわり道として、研究を支える考え方となる認識論と方法論について考えていきたい。

認識論とは、知識の理論に関する哲学の一部門であり、「人はどのようにして物事を知るのか」という問いについて考える学問である (Willig, 2001/2003)。この「どのようにして知るのか」という点については、それを知るための方法論とも大きく関わる。方法論とは、研究テーマを研究するためのアプローチである。方法と混同されやすいが、方法は実際の研究技法のことを指す

(Silverman, 1993)。

質的研究は、「多様な現実に向き合う方法がマニュアル的な形にはなりえないことを自覚したところからはじまる」(能智, 2007; p.34)といわれているように、その調査方法も分析方法も、画一的なマニュアルがあるわけではない。先にも述べたが、McLeod (2001/2007) が示唆している質的分析のプリコラージュ性に示されているように、研究者自身も研究のツールとなって、目的にあった方法をつくりあげていくことが必要となる。さらに、何が質的研究で望ましい立場かを問うたり、定めたりするよりも、自らが依拠する立場に自覚的であることが大切である (遠藤, 2007)。これは、自分の認識についても常に自覚する必要があるということである。つまり、借り物の方法論をただ適用するのではなく、自らが知りたいことを知るためにはどのようにすればよいか、研究者なりの工夫が必要だということである。

以下で明証していく2つの命題は、もちろんどちらもある認識論(方法論)に依拠し、成り立っている。まずは(2)「研究者の主観をデータにした『研究』は研究である」という命題について、その土台となる認識論から説明していく。

4. 近代認識論のはじまりと研究者の主観

本節では、命題(2)「研究者の主観をデータにした『研究』は研究である」ことについて、その基礎となる認識論について論じながら、論証していく。

認識論の問題を論じるにあたり、まずひとつ指摘しておきたい。近代の自然科学では、実験によって立証されるものを客観的とする方法を確立し、人間は客観を正しく捉えることができると確信し、客観的に捉えられたことが学問的にも正しい

とされてきた、という点である（竹田，1989）。まず、主観とは何かというと、広辞苑では、「客観に対する語」とはじめにあり、「対象の認識を構成する自我や意識」という意味がある。その一方、客観は「主観の認識および行動の対象となるもの」とある。つまり、客観とは、主観と対比させられたものであるが、たどっていくと客観も主観の一部なのである。それゆえに主観はさまざまなものを認識するときの底板のようなのだと捉えることができる。

しかし、哲学においては「主観－客観問題」として、主観と客観は一致するのかという問題が長い間議論されてきた。哲学者である竹田（1989）の例をここで借りたい。目の前に石ころがあった場合、私たちは石ころを明らかなものとして見るだろう。しかしこれを厳密に考え、私たちが見ている〈認識としての石ころ〉（いわゆる主観）とそこにある〈対象としての石ころ〉（いわゆる客観）が同じものだという保証、すなわち私たちが正しく石ころを見ているということを客観的には確かめることはできない。これが主観と客観の一致を確かめることはできないという問題であるのだ。

こうした「主観－客観問題」は、デカルト、カント、フッサール、ヘーゲル、ニーチェといった哲学者が次々と論を展開してきた。カントは、自分たちが観察しうる現象、見えたり意識できたりすることから何かしらの真実を紡ぎ出すことができると考えた。これが「超越論的転回」という近代の認識論を徹底したものの考え方であり、主観に還元する立場からそれまでの自然科学のあり方を見直そうとする流れである（高田，2011）。

カントの考え方をさらに意識や認識の方向へ強く進めていったのが、現象学の創始者であるフッサールである。現象学とは、客観を前提とせず、個人にあらわれる主観、いわゆる「意識」やその人の体験を現象とする。そして、現象に関わる自

分の信念や判断を一度カッコに入れ留保するという現象学的還元を行なうことで、人間の生活世界（生きられた世界）を理解していくものである（Husserl, 1954）。言い換えると、私たちが認識するもの、意識するもの自体に立ち返り、私たちが知っている（と思っているもの）を1度排除し、カッコに入れることをまず行なう。これが現象学的還元というものだが、ある仮定や前提に基づいて考えを進めることを一旦停止することである（Willig, 2001/2003）。これを行うことで、意識に現れるものが存在するという確信の条件を問い、意識の内在的な構造を問題にすることで、その現象の本質を見出そうとしたのである（竹田，1989）。すなわち、フッサールは、現象学の方法としてもっぱら自己反省を強調した。自分が感じているもの、見ているものといった主観が他の人にも通用するものなのかどうか、正しいものかどうかを確かめるのは、自己反省による“主観の同型性を確かめ合うゲーム”なのだと言った（西，2001）。そこで問題になるのは、「主観－客観問題」で問われてきたような主観と客観の一致を確証することではなく、人間は〈主観〉の中に閉じ込められているにもかかわらず、これが現実であることは「疑いえない」ということをどのように確信しうるのか、という〈主観〉の中での確信の条件をつきとめることだとフッサールは言ったのである。ニーチェは〈客観〉それ自体は存在しないという。しかし、フッサールは、人間の認識が本性上必ずある切り口を持つものである以上、客観の認識も、客観という概念それ自体も背理であるという。それでも人間は客観存在や現実存在を疑ってはいないし、それを根本的に疑うこともできない。だからこそ、人の主観を出発点とし、この主観の内側だけで確信が生じる根拠を求めることが重要なのだと続けて主張している（竹田，1989）。

このように現象学の考えが生まれ、人々の主観

に尋ねていく、つまり人々の主観を手がかりとして物事を探究する方法が確立していったのである。この方法が生まれたことにより、個人の直接的な経験が集約され、世界像が形成されることを個人の知覚や認識の側から説明するという、非常に大きな認識論の方向転換が示された。

こうした現象学の考え方は、心理学においても「現象学的心理学」という形で影響を与えており、人間の経験を、日常生活のなかで生きられているままに探究することを目的に利用されている。その課題は、新しいアイデアを生み出すというよりも、私たちの行動や経験がそれに基づいているような前提や観念を明示化し、理解することにある (Giorgi, 1970 : Keen, 1975)。その際には、対象者の主観的な経験を明らかにするという意味合いも込められているが、もともと現象学において重要とされるのは、研究者の側の主観に立ち戻ることである (能智, 2011)。

以上、近代の認識論のはじまりとしての超越論的転回を支えたフッサールの現象学について述べた。次いで、いかに人間の主観、そして研究者の主観というものが物事を考える際の出発点となるのかについて現象学の考え方を基に論じてきた。このような認識論を背景にすることで、「研究者の主観をデータにした『研究』は研究である」は明証可能であると考えられるだろう。

ここで質的研究における「主観」はどのようにデータとして表れているかを考えておきたい。たとえば、観察によるデータがある。これは研究者が見たものがデータとなっているが、現存の研究において観察によるデータを用いた研究は数計り知れない。では、筆者が行ってきた自己エスノグラフィにおける研究はどうだろうか。自己エスノグラフィは、研究者が経験したものの記述がデータとなる。つまり、観察における研究者が見たものも研究者が経験したことに内包されるだろ

う。したがって、自己エスノグラフィによる研究も、質的研究における主観をデータとした「研究」だと言える。

また、研究者の「主観」をデータとした研究には価値があるという議論もなされている。人間的了解という人間の生の豊かな意味を明らかにすることを旨とする質的研究 (大倉, 2008) においては、生きた主体の一人称の体験の記述は、その読み手にも気づきを与えることができる伝達可能性を持っているという。そこには、読み手がそこから新たな意味をまた生成することができるという新たな価値がある研究方法のひとつであるという議論もなされている (藤井, 2012)。こういった点において、研究者の主観をデータにした研究は、研究としての付加価値が見いだされるものでもある。

5. その後の認識論の流れと対話

前節では、命題 (2) 「研究者の主観をデータにした『研究』は研究である」ことについての論証を行なったが、本節では続く命題 (3) 「対話で得られたデータに基づく『研究』は研究でありうる」ことの検討を行なう。そのために、この論を支える認識論が生まれることとなった、前節で論じた「超越論的転回」に続く現代思想における認識論の流れを簡単に追いつながりながら論じていく。

認識論の流れとしては、超越論的転回に続いて現れたのが、言語的転回である。これは20世紀初め頃のソシュールの言語学がきっかけとなったもので、世界の認識の視点の中心は言葉にあり、人間は言葉の秩序を持ち、それで世界を切り取っているという考え方である (竹田・西, 2004)。これは、主観がさらに言語に還元される、すなわち世界認識が言語によって構成されているという立場をとる。

ソシユールは、言語学を一般記号学の一部門として位置づけた上で、ランゲージュ、ラング、パロールの概念を明確にしている。ラングとは言語であり、特定の社会や文化の中で制度化した、文法や意味に関する構造や社会制度のことである。パロールは、言葉や個人の発話行為である。そしてランゲージュとは、言語活動であり、ラングと、ラングの実現としてのパロールを合わせた個別言語の総体を指す、と定義した(丸山, 1983)。ソシユールは文化の中で主観が支えられると考えた。そこで、文化によって作られるラングが表現される個人的なパロール、すなわち、個人の発話や言語行為を捉えていくことで客観から世界を捉えていこうとした。これが言語的転回の大きな思想である(高田, 2011)。

このように、超越論的転回から言語的転回への移行には、主観に還元するところから、主観の外部を再び考慮するという揺り戻しの動きがあった。しかし、その言葉が客観的であり、常に一定の意味を受け手に与えるという主張への批判から、ガダマーをはじめとする、解釈学的転回が生まれた。

ガダマーは解釈学の開祖であり、ある表現を見聞きした人間において発生する意味や認識は、作者が想定していたものと一致することはないと指摘した。つまり、表現者の意図や意味というものがそっくり受け手に伝わるということはなく、その作品は受け手によって意味が異なり、意味が再生産されるということである(Gadamer, 1975)。

ここで重要なのは、受け手、つまり解釈者によって解釈された物語に対して、表現者が示した枠組みでもなく、それまで解釈者が保持していた枠組みや価値でもない、新たな意味の生産がなされ、新たな世界の理解の仕方が生まれているということである(McLeod, 2001/2007)。新たに生まれた解釈とは新たな意味や価値の生産であり、それ

は解釈者、いわゆる受け手側から発生するものであるということである。

それまで意味や価値というものは、ある人間が想像し、それが他者へ伝達されることで広がるという考え方が中心であったのが、その受け手側、解釈する側の主観においても新たに意味や価値が発生するという考えが生まれたところに解釈学的転回の大きな貢献がある。そして、個人がどのような解釈や語りをするのかということに注目するようになったことで、再度主観に世界認識の中心を置こうという思考が広まった。

これまで認識論の流れを見てきたが、超越論的転回、言語的転回、解釈学的転回というものは、それぞれが全く別のものというのではなく、以前のものを含んでいる。つまり言語的転回には超越論的転回の考えも含まれているし、解釈学的転回には超越論的転回も言語的転回も含まれる。いわばスパイラル形式のように、以前のものに新しい要素が加わるという形で常に発展しているものである。こうした発展を経て、現代思想においてはコミュニケーション的転回がなされた。これが命題(3)「対話で得られたデータに基づく『研究』は研究でありうる」ということに大きく関わる認識論である。

超越論的転回では個人の主観に還元され、言語的転回では言葉に還元され、解釈学的転回では再度主観に還元されるという流れであった。これが、コミュニケーション的転回では、人と人とのコミュニケーション、つまり対話が人と人が何らかの合意に至る際に重要視されるようになったのである。これは哲学者アーベルが端緒を開いたと言えるが、ウイトゲンシュタインやパース、オースティンなどにルーツがある(高田, 2011)。

バフチンは、ソシユールへの批判として、人間の言葉を研究するにあたり個人のパロール(発話行為)を見るのではなく、ダイアログ(対話)と

して捉える必要性を説いた。ことばを用いたあらゆる行為はモノローグ（独話）ではなく、対話の形態をとるといふ。たとえそれが独り言であったとしても、内的対話として、発話の向こうには必ず受け手が想定されるという。バフチンは対話こそが、言語のもっとも自然な形態であり、対人間における対話の中でのパロールの生成を捉えることこそが人間研究のひとつの形であると論じた（バフチン、1930/2002）。

誰かが話した「主観的な事実」を、聞いた相手が認めうる「客観的な事実」にするには、それを明証する論理が必要であるが、ある命題を証明しようすると、結局その証明に使用した根拠を次から次へと提示する必要がでてきて、無限に根拠を求める状態になり、命題の証明は不可能になってしまう。それゆえに、主観的な事実を客観的な事実にするのは論理的には不可能となる。しかし、ひとりが提示した主観的事実を、もう一方が合意することはできる。このことから、客観的事実を「合意」の別名であると捉えることもできる。ここでは、2人の論理体系の突き合わせが必要となる。2人の論理体系に矛盾があった場合には自分の論理体系を一部改変することになる。これが合意というものであり、ひとつの客観的事実のありかたである。そしてこの合意には対話が利用される。さらに、その合意がどのようになされたのかを明証することは対話そのものによって可能であるとアペルは説いた。対話、そしてコミュニケーションを意味の生成の場と捉え、言語はコミュニケーションを通して意味を生成するための道具であると捉えるような考えが広まってきたのである（高田、2011）。

以上みてきたように、これまでの近現代思想は、正しさの基盤を得ようという目的のもと、「主観と客観は一致するのか」といった課題から出発し、議論を進展させてきた。現象学の立場から考えれ

ば客観も主観のひとつに過ぎないものである。また、主観も、個人のみには帰属するものではなく、他者から切り離されたものでもなく、対話の中で形成されたものという考えがコミュニケーション的転回ではなされており、人々の中での合意として捉え直していく必要があるということである。

これまでの議論をまとめると、超越論的転回において、人々の主観からモノを考えようという認識がはじまった。人間の言葉と概念は時代と共に変化し、独自に発展していくものである。そのため、人々の言葉と概念の使い方を捉え直していく必要があり、それは認識論的転回においても捉え直されてきた。それを人々の語り、日常の言語使用やコミュニケーション、つまり個人的なパロールから立ち上がるという認識だったのが言語論的転回であった。しかし、バフチンなどはそれを批判し、語り直しを捉えていく方法として重要なのは個人的なパロールではなく、ダイアログ、つまり対人間との対話の中でのパロールの生成であり、それを捉えることこそが人間研究のひとつの形であると論じたのである。これがコミュニケーション的転回である。

このコミュニケーション的転回における認識論が、命題(3)「対話で得られたデータに基づく『研究』は研究でありうる」を支えるものとなる。つまり、語り合いという対話それ自体とそこから得られたものをデータとし、そこで何が合意されているのかを明らかにしていくことは、研究であると言えるだろう。Apel (1976/1986) によれば、あるメンバー同士が対話によってあることに合意したとき、そのメンバーにおいてそれが正しいとされる。それが他の人にも正しいとされるわけではないのだが、それがいかにそのメンバーの間で合意に至ったかを示していくことが研究になるということであろう。こういった点からも、命題(3)「対話で得られたデータに基づく『研究』は研究

でありうる」は論証可能であると考えられるだろう。

6. 間主観的アプローチ—方法に向けて

これまで、3つの論について、認識論を基礎づけとしながら明証を行ってきた。以下では、特に命題(2)と(3)の論が可能となる方法論として、現象学を基にした間主観的アプローチについて述べていく。次いでその方法論を可能にしていくエピソード記述という方法について説明する。つまり、以下では、研究者の主観や、語り合い(対話)をデータとした研究がいかなるアプローチによってなされるのかを論じていく。

間主観的アプローチは、ひとがひとをわかるということとはどのようなことか、といった間主観性に関する問題を考えるアプローチである。間主観性という現象は、別々の主体である2人以上の人間の間で、一方から他方へ「通じ」たり、「分かち合」われたりすることである(鯨岡, 2012)。つまり、「相手とこちらのあいだで気持ち(主観性)が通じ合うこと、相手の身体とこちらの身体のあいだで相手の感じていることが通じてくること」である(大倉, 2011:p.20)。これは、コミュニケーション的転回のところで述べた、対話による合意形成とほぼ同義である。重要なのは、間主観性の現象が発生する必要条件が「二者間において、これまでの関わり合いの経験の積み重ねの中で、一方が他方に強い関心を向け、自分の気持ちを相手に持ち出して、相手に自分を重ね、相手に寄り添おうとする」(鯨岡, 2012:p.185)ことである。そして、間主観性という現象が起こる理由として、この必要条件のような状況の下では、人と人が身体的にも情動的にも同型的に機能するからだとして述べている。つまり、人は同じ人間として同類であり、共通する面や同型的な面が多くあり、感情や

情動が相互に浸透したり、身体的に互いの動きが同期してきたりするということである。

こういった間主観的アプローチを可能にする方法として、エピソード記述を鯨岡(2005;2012)は提案している。これは心を動かされる体験や、強く印象づけられた人の生の断面が主に描かれるものである。この方法が生まれる背景には、保育や臨床などの現場で実践や研究に携わる人々が、人間の生に触れる中で、何とかその体験を言語的に表現することで、日々の関わりを深く考察したいという思いがあったことがまずある。そして子どもや患者、クライアントなど、実践の対象者に関する日々の記録を積み重ねることで、相手をよりよく理解し、よりよい関わりにつなげていこうとする思いもあったと挙げられている。要するに、人の生の断面を生き生きと描くことという共通する目的があったのである(鯨岡, 2005;2012)。

しかし、ただ、ある人の生の断面や、そこでの自分(エピソードの書き手)の体験や気づきを描くだけでよいわけではない。エピソード記述は、単なるエピソードの記録とは異なり、読み手が想定され、何かを読み手に伝えたいという思いが重なって描かれるものである。そこには「人が生きるとはどういうことか」「子どもが遊ぶとはどういうことか」といった何かしらの疑問が背中合わせにあり、関わることの意味、支援することの意味、人を理解することの意味などといったさらに大きな問いが立ち上げられているのである。ひとつひとつのエピソード記述は、こうした問いとの関連において、多面的な「意味」を生み出すことに向かうものである。そして、エピソード記述はその新たな問いから、エピソードの読み手、つまりは他者と「意味」を共有することを目的とする方法なのである(鯨岡, 2005)。

エピソード記述においては、従来の対象者の行動記述に徹した事例研究でも、ある行動カテゴリー

リーの生起頻度を数えるような数量的研究でも捉えられない、その人の固有の生のありよう、「生き生き感」や「息づかい」が提示されることとなる。そのためには、記述をする「私」、事象の関わり手としての「私」を経由して書かれることが重要となる。それこそが、他者の主観（心）の中の動きをこの「私」の主観（心）において掴むという意味で、「間主観的に把握されるもの」ということになるのである（鯨岡，2005）。

こういったことは従来の行動科学の枠組みでは捉えることはできないと鯨岡（2005）はいう。むしろこのような間主観的な理解というものは、行動科学においては排除されてきた。客観的なパラダイムからは、間主観的な理解提示に対して、「それは事実なのか、書き手がただ主観的に判断したことにはすぎないのではないか、反証可能性はあるのか、その論は証明できるのか」といった批判がなされてきた。これは冒頭で述べた通りである。

しかし、先述の通り、質的研究においてはまた異なる研究の質の評価基準がある（Flick, 1995/2002）。その中でもエピソード記述においては、「了解可能性」、すなわち読者に研究を理解させ、共鳴させること（Willig, 2001/2003）が、そのエピソード記述から生まれた研究成果の意義を主張するものとなる。つまり、読み手がそのエピソードに自分の身を置いて考えた際に、いかに納得できる記述になっているかということである。そこに研究としてのエピソード記述の一般性が開かれているのである。

しかしそれと同時に、研究者が「これでいいのか」と問い続ける姿勢や態度は欠かせないものでもあるし、間主観的に分かるということが恣意的でないということを積極的に伝えていくためには、エピソードの背景をいかに読み手と共有できるかという点が鍵となる（鯨岡，2005；2012）。恣意的でないことを言うために背景が重要である

ことと並行して、了解可能性をエピソード記述に与えていく方法として「メタ観察」がある。これは、先ほど述べた「私」を経由してエピソード記述が書かれるということにつながるのだが、メタ観察とは、「観察されたものについての観察・省察」である。人の生き様を生き生きと描き出すという目的をもとに、観察者が感じたこと、思ったこと、つかんだこと、そのときの状況や背景を、観察したものとともに提示するものであり、エピソードとセットで提示される（鯨岡，2005）。

エピソード記述は、理論的背景に現象学を取り入れている。それと同様に、精神科医である木村敏は、現象学の見方を精神病理学に取り入れている。現象学的精神病理学を実践するなかで木村（1993）は、患者がどのような問題を抱えているのを追及するときには、患者から語られた言葉だけではなく、患者の表情や身ぶり、雰囲気、なにげない行動、医師への態度なども観察の対象としているという。対象を理解するのに、言葉だけではなく、雰囲気や態度、行動といった観察されたものも十分に吟味していくのである。このメタ観察の中に、どのようにして「私」が相手を間主観的に分かっていったのか、ということが説得力を持って書かれる必要があるわけである。

エピソード記述においては、「私」の体験が描かれることになるが、これはいわゆる一人称の体験の記述である。一人称の記述は先にも述べたように、客観的な科学においては排除されてきた主観を中心とするものである。現実の対人関係においては、そこで生起する事象をそれに関与する主体がどのように体験しているかが何よりも重要な意味を持っている。だからこそ、対人関係の中で、相手を「自分はこのように分かった」という間主観的に感じ取ったことについての一人称の記述は、そこでの出来事を躍動感をもって伝える上で重要である。さらには、その出来事を踏まえてそ

の対人関係が動いていくことを考える上でも、重要な意味を持つ研究のあり方だということが主張されている（鯨岡，2012；大倉，2011）。

したがって、このような方法を用いた研究における分析では、研究者の一人称の記述がなされるわけであるが、それは、同時に相手の世界を研究者がどのように感じてその解釈や分析をしたのか、という重要な手がかりにもなる。ただ語りのデータを証拠のように提示していくのではなく、その場にいた研究者の間主観性を利用した解釈や分析を展開していくこととなるのである。

7. おわりに

以上、質的研究の方法論として、世界の認識を主観に尋ねる方法、なかでもそれを対話的に、間主観的に理解していくことと、それを一人称の体験の記述を重視しながら進めていく方法の可能性について論じてきた。その際、本章の冒頭で述べた、（1）質的研究は、研究である、（2）研究者の主観をデータにした「研究」は研究でありうる、（3）対話で得られたデータに基づく「研究」は研究でありうる、という3つの命題についての段階的な明証を基に論じてきた。このような研究者の主観、あるいは対話を基にした研究は、質的研究の今後の発展において重要な位置を占めていくだろう。しかし、これらのアプローチは、研究者の独りよがりや思い込みであるとか、研究者が意図する結論に対話を方向づけているのでは、と批判されることもあるかもしれない。そのような批判にこたえていくには、あるいはそのような批判を受けないために大切なのは、研究者の主観や、何かしらの合意に至った対話の提示の仕方であろう。読み手がいかに了解し、納得する研究あるいは論文であるか、というのはこれらのアプローチに限らず質的研究全般における課題である。今後

は、こういった了解可能性を高める記述や、読み手に気づきを与え、感動や揺さぶりをかけるような記述についても検討していきたい。

謝辞

本論文は、2012年度に東京大学大学院教育学研究科に提出した博士論文の一部を加筆修正したものです。指導教員である、東京大学大学院の能智正博教授に改めて感謝申し上げます。

引用文献

- Apel, K. O. (1976). The transcendental conception of language-communication and the idea of a first philosophy. *History of Linguistic Thought and Contemporary Linguistics*, W. de Gryuter. (平石隆敏 (訳)(1986). 言語コミュニケーションの超越論的構想と第一哲学の理念. アーペル (著) 磯江景孜・松田毅・水谷雅彦・北尾宏之・平石隆敏 (訳) 哲学の変換. 二玄社. pp.3-58.)
- バフチン, M. (2002). バフチン言語論入門. 桑野隆・小林潔 (編訳). 東京: せりか書房.
- Behar, R. (1996). *The vulnerable observer: anthropology that breaks your heart*. Boston, Beacon.
- 遠藤利彦. (2007). インTRODクシヨ: 「質的研究という思考法」に親しもう. 秋田喜代美・能智正博 (監修) 遠藤利彦・坂上裕子 (編) 事例から学ぶはじめての質的研究法 生涯発達編. 東京図書. pp.1-43.
- Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Rowohlt Taschenbuch Verlag Gmb. (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳). (2002) 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論. 東京: 春秋社.)
- 藤井真樹. (2012). 共感を支える「共にある」という地平—父の闘病に寄り添う体験の記述から. 質的心理学研究, 11, pp. 63-80.
- Gadamer, H. G. (1975) Hermeneutics and Social Science, *Cultural Hermeneutics*, 2 (4), pp. 307-316
- Giorgi, A. (1970). *Psychology as a human science*. Harper and Row, Publishers, Inc. (早坂泰次郎 (監訳)(1981) 現象学的心理学の系譜—人間科学としての心理学— 東京: 勁草書房.)
- 南風原朝和. (2001). 量的調査—尺度の作成と相関分析. 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦 (編) 心理学

- 研究法入門—調査・実験から実践まで. 東京: 東京大学出版会. pp.63-91.
- 原田満里子・能智正博 (2012). 二重のライフストーリーを生きる——障害者のきょうだいの語り合いからみえるもの——. 質的心理学研究. pp.11, 26-44.
- Husserl, E. (1954). *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*. Husserliana Bd. VI, Haag, Martinus Nijhoff. (細谷恒夫・木田元 (訳). (1974). ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学. 東京: 中央公論社.)
- 市川伸一 (2001). 心理学の研究とは何か. 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦 (編) 心理学研究法入門—調査・実験から実践まで. 東京: 東京大学出版会. pp.1-17.
- Keen, E. (1975). *A primer in phenomenological psychology*. Holt, Rinehart and Winston, Inc. (吉田章宏・宮崎清孝 (訳) (1989) 現象学的心理学. 東京: 東京大学出版.)
- 木村敏. (1993). メタ精神医学としての現象学的精神病理学. 精神医学論文集 (2001) 所収 [木村敏著作集第5巻], pp.443-453. 弘文堂.
- 鯨岡峻. (1999). 関係発達論の構築—間主観的アプローチによる. 京都: ミネルヴァ書房.
- 鯨岡峻. (2005). エピソード記述入門 実践と質的研究のために. 東京: 東京大学出版.
- 鯨岡峻. (2012). エピソード記述を読む. 東京: 東京大学出版会.
- Lincoln, Y.S. & Guba, E.G. (1985). *Naturalistic inquiry*. CA: Sage.
- 丸山圭三郎. (1983). ソシユールを読む. 東京: 岩波書店.
- McLeod, J. (2001). *Qualitative Research in Counseling and Psychology*. Sage. (下山晴彦 (監訳). (2007). 臨床実践のための質的研究法入門. 東京: 金剛出版)
- McLeod, J. (2003). *Doing counseling research*. 2nd ed. London: Sage.
- 西研 (2001). 哲学的思考—フッサール現象学の核心. 東京: 筑摩書房.
- 能智正博. (2005). 質的研究の質. 伊藤哲司・能智正博・田中共子 (編) 動きながら識る, 関わりながら考える—心理学における質的研究の実践. 京都: ナカニシヤ出版. pp.156-166.
- 能智正博. (2007). 質的研究と臨床・社会心理学. 秋田喜代美・能智正博 (監修)・能智正博・川野健治 (編) 事例から学ぶ はじめての質的研究法 臨床・社会編. 東京図書.
- 能智正博. (2011). 質的研究法. 東京: 東京大学出版会.
- 沖潮 (原田) 満里子 (2013). 対話的な自己エスノグラフィ——語り合いを通じた新たな質的研究の試み——. 質的心理学研究, 12, pp.157-175.
- 沖潮 (原田) 満里子 (2016). 障害者のきょうだいを抱える揺らぎ——自己エスノグラフィにおける物語の生成とその語り直し——. 発達心理学研究, 27, pp.125-136.
- 大倉得史. (2002a). ある対照的な2人の青年の独特なありようについて. 質的心理学研究, 1, 88-106.
- 大倉得史. (2008). 語り合う質的心理学—体験に寄り添う知を求めて. 京都: ナカニシヤ出版.
- Silverman, D. (1993). *“Beginning Research” . Interpreting Qualitative Data. Methods for Analysing Talk, Text and Interaction*. London: Sage Publications.
- 下山晴彦. (2001). 臨床における実践研究. 南風原朝和・市川伸一・下山晴彦 (編) 心理学研究法入門—調査・実験から実践まで. 東京: 東京大学出版会. pp.191-218.
- 高田明典. (2011). 現代思想のコミュニケーション的転回. 東京: 筑摩書房.
- 竹田青嗣. (1989). 現象学入門. 東京: 日本放送出版協会.
- 竹田青嗣・西研. (2004). よみがえれ, 哲学. 東京: 日本放送出版協会.
- Willig, C. (2001). *Introducing qualitative research in psychology*. Open University Press. (上淵寿・大家まゆみ・小松孝至 (共訳). (2003). 心理学のための質的研究法入門—創造的な探究に向けて. 東京: 培風館.)

Potentiality of dialogue in qualitative research: Inquiry of methodology

Mariko OKISHIO

【abstract】

The purpose of this paper is to clarify the possibility of research using subjectivity and dialogue of researchers in qualitative research. To that end, three propositions are proved; (1) qualitative research is research, (2) “research” using the subjectivity of researchers as data can be research, and (3) “research” based on data obtained through dialogue is research. At that time, we will follow the evolution of epistemology that has supported people’s ideas and thoughts. Finally, we will discuss how inter-subjective approaches based on phenomenology can be used to determine how research using subjectivity and dialogue is possible.

【key words】

Qualitative research, Epistemology, Methodology, Subjectivity, Dialogue